

進化は万能である マッド・リドレー 早川書房

第11章 人口の進化 担当3班 前澤 川村

● 序章 (担当 前澤)

・人口というテーマに関して、生物学を根拠として、ほとんど想像を超えた規模の残虐行為を正当化する邪悪な流れが続いている。

・近年の人口抑制政策は、互いに無関係なエピソードではなく、直接結びついているのではないか。

・マルサスは際限のない人口増加は取土地、食料、燃料、あるいは水が枯渇した時、悲惨な状態、飢餓、そして病気をもたらすと主張。

・マルサスは人口増加を止めるには残酷な政策が効果的だと考える。

・結果として、ほとんどの人がマルサスから取り入れたのは親切な目的を正当化するために不親切な手段を使わねばならないという、残酷な教えであった。

● アイルランドで採用されたマルサス理論

・マルサスの教義は、晩婚化という彼の第一の解決策は無視されたまま直接政策に影響を及ぼした。

→イギリスの新救貧法は明らかにマルサスの考え方に基づいていた。

例としてアイルランドで起こったジャガイモ大飢饉が挙げられる。マルサスの考え方によって飢饉はとことん悪化し、結果として百万人のアイルランド人が餓死した。

・ロバート・ブルワー＝リットン＝インド総督として統治に派遣された。マルサス主義者であった彼は、「インドの人口は、彼らが土壌から育て上げる食料よりも早く増加する傾向がある。」として、飢餓に苦しむ人々を救済しようとする民間の計画を阻止した。

→その結果一千万にも及ぶ人々が命を落とした。

・マルサスが歴史に及ぼした影響は、悪いものばかりではなかった。

● 結婚の国家制度化

・ダーウィンのいとこのフランシス・ゴルトンは人々が結婚相手をもっと注意深く選び、適者のみが子孫を残し、不適合者たちは残さないようになってほしいと考えた。彼が実際に「不適合」な人々に不妊手術を行ったり、殺したりするよう提言したことはなかった。

・ドイツではヘッケルが自ら一元論と呼んだ理論の中で、マルサス的論争を疑似宗教的な方向へと持っていった。ヘッケルの追随者たちは、優生学に人種差別的色合いを加えた。

・グレゴール・メンデルの発見した粒子遺伝と劣性遺伝は、選択的な子作りで人類の劣化を防ごうという考え方をきわめて困難で実行不可能なものにした。だが遺伝学上の事実は、議論には影響せず、計画的子作りという妄想に駆られ、右翼左翼両方の政治思想集団が、不適合な血統が広がるのを防ぐために国が子作りを規制するよう運動した。

● 不妊手術の始まり

・アメリカでは1910年、精力的な優生学者チャールズ・ダヴェンポートによって優生学記録局が設立された。局長のハリー・ラフリンは優生学法のモデル法を作成した。二人はこのモデルを掲げ、精力的にロビー活動を行った。

→その結果、問題のある者に対する強制不妊手術を認める法律が成立した。

・この「優生学的人間憎悪」の流れに自然崇拜という新たな考え方が加わる。ドイツでも自作農社会を再建しようとする、自然回帰的な考え方があった。

・カリフォルニアではほかの州よりも多くの人に不妊手術を受けさせていた。ドイツの不妊手術のノウハウはカリフォルニアから得たものであった。

- 殺人の正当化

- ・ナチス・ドイツでは様々な方法を使い、組織的なユダヤ人の迫害が始まる。
- ・ドイツからのユダヤ人移民の受け入れに対する、ヨーロッパ、アメリカの抵抗。

→結果、ユダヤ人の大勢が殺害される。

- ・ナチス政権によるT4作戦などの政策の大量殺人。

- コメント

マルサスの考え方は全体を通して、殺人や不妊手術などの残酷な手段を使ってでも、貧しい人々を大切にせず、人口を抑制していくべきであるというものだった。確かにそうしていけば自然と優秀な人だけが残っていくかもしれないが、罪のない人を殺してまでやるべきことなのか非常に疑問に感じた。

ふたたび人口問題 (担当 川村)

*行きすぎた政策の結果の悲惨さを目の当たりにした結果、優生学は衰退した。

→果たして本当か？

*ヘンリー・フェアフィールド・オズボーン (優生学者)

→人口急増、資源枯渇、土地消耗、DDTの過剰使用、技術への過剰の依存と性急な消費主義へ傾倒するマルサスの懸念を想起。

*ウィリアムボード (生物学者) (差別主義者)

→”残念なことに”、戦争、ドイツの大虐殺、各地の栄養不足が起こったことにも関わらず、ヨーロッパの人口は、1100万人も増加した。

インドはイギリスに支配されたが、同時に飢饉から解放され、結果人口は増加した。

*人口抑制問題と優生学の結び付きは大西洋側だけの問題ではない。

*サー・チャールズ・ゴルドン・ダーウィン

→戦争、幼児殺害、不妊手術などの徹底的な手段以外、人口を制御することはできないと主張。

人口問題で脅迫する

*ウィリアム・ドレイバー (陸軍自衛官)

→共産主義に走る人を減らすという思想。政財界の権威ある人物を引き入れ、共産主義打倒には強制的な人口抑制が必要だと説いた。

1966年に人口抑制はアメリカの対外援助の一環と認められ、重視されるようになった。

不良品の経口避妊薬、未承認の避妊薬や未消毒の避妊リングなどを、貧しい国に援助物資として配布するまでに至る。

*レイブンホルト

→彼は、『乳幼児死亡率を低下させることは、その生き長らえた命の数とほぼ同数の命の誕生を防ぐことで相殺しなければ、アフリカ社会に悪影響を及ぼす』と主張。食料の援助をする代わりに、避妊やパイプカットなど人口抑制を促すようにと迫り、そして実行された

*欧米の評論家の中には飢餓を放置すべきという声もあった。

*パドック兄弟（ウィリアムとポール）

→低開発国を三つの段階に分け、支援しても無駄になるであろう国、救われざる国は運命に任せるべきだ、とした。

*ポール・エーリック

→インドは食料を自給自足できないと断定。人口抑制をするにあたり、自主的にやって失敗するのであれば、強制的に策を施すべきだと主張。『正当な理由のもとの強制』

その手段として、上水道に不妊剤を添加、食料援助の条件として子供が三人以上の者に不妊手術の強制を望ましいと訴えた。

結局インドでは不妊手術の傾向がほぼ強制に強まっていった。

人口問題における懐疑主義者

*インドでも他の地域でも出生率はすでに低下していた。

*マルサスの予測とは裏腹に、食糧生産は人口より早いペースで上昇。

（合成窒素肥料と短稈種の新穀物の登場の活躍）

*人口爆発の解決策は、強制的な不妊化や高い乳幼児の死亡率を維持するのではなく、乳幼児を生かし続けることであった。

→死なないのであれば、家庭は少ない数の子供を維持しようとするため。

*しかもこの事実は不妊化が強制される前に、一部の人は知っていることであった。

*結局人口爆発の解決は緑の革命と人口転換であった。

*人々がより裕福になり、より健康に、都会的に、自由に、教育水準が高まった結果、より小さな家庭を持つ世帯が増え、図らずも人口は縮小していった。

実は西洋に起源があった一人っ子政策

*中国の一人っ子政策は、新マルサス主義が元となったおそらく最初かつ広

*範囲に及ぶ政策

*毛沢東の人口政策は控えめで人道的であり、一時期出生率を半減させることに成功（晩婚、出産間隔の長期化、子供は二人、しかし強制ではなく奨励）

*宋健が手に取った二冊の本

①『成長の限界』…コンピューターシミュレーションを用いて人口過剰と資源の枯渇により人類は絶滅すると記述。

②『人類にあすはあるか』…庶民の変化や技術、消費主義が、エリートや富裕層に追い付こうとしている状況に対し、軽蔑を表している著作

世界の貧しい国の食糧問題について、予測される食糧需要に対しどれだけ農業生産は増加するのか予想するのは現実的ではないとし、人口増加の終結に専念するとした。

また、その人口増加の終結には、移民排除も視野にあるとしている。

*上記二つは反動主義的な文書。

*宗は一人っ子政策は社会領域での強制的なトップダウン型アプローチが必要だと察知。

*疑う者は少なく、エコロジカルに生きるためには2080年までに人口を1/3まで減らそうとする動きが見られる。

*銭信忠は、二人以上子供がいる女性への不妊手術の強制。子供一人以上女性全てにIDU挿入、年齢が23歳以下の女性の出産禁止、不正な妊娠は中絶が命じた。

→規則に反した者は懲罰にあう。

*マルサス主義に先立つ救貧法は道徳的にも実利的でも間違っていた。

・インドやアイルランドの飢饉に対するイギリスの態度は間違い

・優生学、ホロコースト、不妊手術政策、一人っ子政策は間違いであり、作為の罪だった。

*進化のメカニズムによって計画なしに起こる、自発的な現象として人口転換を受け入れるべきだ。

コメント

様々な作為的な人口抑制は結果的には、人口抑制に結びつかないというのは、なるほどだと思う。生物が子孫を残そうとする本能から、抑制されたからといって思惑通りにならないのは、不思議と自然なことだと受け入れられる。